英文学と私

宮崎孝一

ご紹介ありがとうございました。今日は土曜日でみなさんお休みのところ、それから天気もたいへん悪いのに、たくさんの方においでいただきまして、身に余る光栄と存じております。私は年数だけは長く成城大学におりましたけれども、全く何をやったのか自分でも見当がつかないような次第でございます。ことにこの数年間はあまり授業に精を出さないで雑用にばかり奔走しておりましたので、今日講義なんて言われても講義とは何をやるのかほとんど思い出さないような状態でございます。で、講義というふうなしっかりしたものはとても出来ませんので、まあ自分の今までの勉強の跡みたいなものの概要をお話しして、たいしてご参考にもならないと思いますけれども責めをふさぎたいと思っております。で、「覚え書き」と称しまして、簡単に私のこれまでの何十年かのことを書いたものを、お配りしておきましたので、だいたいそれによってお話をいたしたいと思っております。

英文学ことはじめ

私が小学校に入った頃、つまり昭和の二、三年のことなのですが、その頃はいわゆる円本というものが非常に隆盛を極めた時代で、さまざまな全集が出ました。で、その中

に新潮社の「世界文学全集」というのがありまして、いろいろな外国の作品が入っていて――当時の翻訳家は英文学者が多かったようで、つまりロシア文学などでもだいたい英訳から重訳したものが多かったようですけれども――、もっともこれは後になって知ったことですが、ともかくそういうものがあって私の家にもありましたので、まだ私はその中身を読むほどの知識がありませんでしたけれども、本の背中だけ見て、例えば『二都物語』だとか、『アイヴァンホー』だとか、『緋文字』だとか（「ヒモンジ」と言うのですかね）、あるいは『ドン・キホーテ』だとか、ああこんな名前の本があるのかとはじめて、まあ後になってみればたいへんな世界文学の名前だけを知ったわけであります。それはただ名前を知っただけで、その後十何年か経って東京高等師範というところに入り、さらに文理科大学の英文科に入って実際の作品に触れたわけであります。

さて、このいわゆる高等師範という系列の学校に入ったことは、私の一生において良かれ悪しかれ大きな影響力があったと今でも思っております。これについては後に申し上げます。で、高等師範に入った頃、当時の東京外語の先生が書いた何か外国語の小説の読み方というふうな入門書がございまして、それを見ましたら、とにかく細かい英語の字句にこだわっていてはだめだと、何でも構わないから読めということが書いてありまして、その先生自身も何か長い小説を、イギリスの小説を読んだんだそうですが、全部読んだ後でひとつだけわかったのは、誰かひとり人物が死んだらしいということだけで、あとは皆目わからなかったというようなことが書いてありまして、私もそれを読んで大いに意を強うしまして、それから専らその主義で英語の本を読むことにいたしました。ですから私の英語は今でもいいかげんかもわかりません。で、その頃はだんだん世界情勢が厳しくなってまいりまして、日本も中国との戦いからさらにいわゆる大東亜戦争というものに入りまして、アメリカ、イギリスを相手の戦争になりましたから、外国の本がほとんど入ってこなくなりました。で、ちょうどそういう折に、プリントに書いておきましたが研究社から「英文学叢書」というものが出まして、その中に主なイギリス・アメリカの名作と言われるようなものは入っておりまして、それに当時の学者たちがたいへん綿密な注釈をつけたものがたくさんに、大体百冊ぐらい出ておりました。それは当時としては非常に有難かったことで、外国の本があま

り入って来ませんから、私たちはそういうものによって最初にイギリスやアメリカの文学というものに接することになりました。で、百冊もなかなか読めるものじゃありませんけれども、まあ小説だけは読んでみようと思って、全部とはいきませんでしたけれども大体読んでみました。同じ頃小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）の全集が出まして、そのハーンの文学作品はあまり読みませんでしたけれども、その中にハーンが東大で講義をした英文学史が入っておりまして、それが非常に易しい英語で書いてあるものですから、わかり易くてたいへん興味深く読みました。その中に十九世紀の探偵小説作家ウィルキー・コリンズについての話がありまして、みなさんご存じのように『白衣の女』とか『月長石』とかいろいろ翻訳がございますが、その作者コリンズの書く悪人というのは一見少しも悪人らしい様子をしていない、たいへんノーブルで、信用できるような恰好をして、それがたいへんな悪いことをする。で、それでこそ悪人は悪いことができるのであって、悪人が初めから俺は悪人だというレッテルを貼っていたらみんな誰も信用しない、だからこういうコリンズの書き方が上手なんだということが書いてありまして、今になってみれば全くあたりまえの話なんですが、当時の私は大いに感心して読んだ覚えがございます。で、その戦争中、あるいは戦争ちょっと前ですか、『学生と読書』とか『学生生活』とか、河合栄治郎という東大の経済学の先生の書いた、いわゆる学生ものというのですかね、そういう本がたくさんに出まして、その中で学生の読むべき本というものをたくさんに紹介してございました。いわゆる岩波文化といいますか、岩波から出ているような哲学や文学の本が多く紹介されていたと思いますけれども、私もそういうものをちょっと読みまして、特に夏目漱石のことがいろいろと書いてあるものですから、漱石の作品や何かを読んでみました。で、漱石というと、『文学論』とか『文学評論』なんていうものがありまして、まあ当時あまりよくはわかりませんでしたけれども、読んでみたのを覚えています。ずいぶん堅苦しい理論ばかり並べてあると思いましたけれども、後になってある出版社に頼まれて、自分でこの『文学論』というものの注釈をやらされる羽目になったときに、なかなかこれは立派な本だと認識を改めた次第であります。

恩師たち

さて、高等師範とか文理科大学というのは、まあだいたい教師を作るところでございますから、そういう雰囲気もあったんですけれども、しかし必ずしもそうばかりでもなくて、非常に学問的な、あるいは芸術的なことに関心のある先生方もおられました。プリントに、心に残る先生方のお名前を挙げておいたのですが、最初に書きました寺西武夫という先生は、これは全く英語教育者そのもの、非常に熱心な先生で、殊に英語でしゃべることを学生たちに訓練するのに情熱を傾けておられまして、クラスの学生を何人かのグループに分けまして、そのグループは毎日お昼休みには必ず集って三十分ほど英語で会話をしなくてはいけない。それから一週間に一遍はそのグループで先生のお宅へ伺って、先生を囲んで英語で話をしなくてはいけない。だから先生にしてみれば、毎日毎日学生たちの、まあ上手か下手かはわかりませんが、英語の話を聞かされていたわけでありまして、考えてみると実に教育的に立派なことをやっていらっしゃったものだと思います。自分の私生活というものはほとんど犠牲にして奉仕しておられた。そういうわけで、当時は一般には英語なんてあまりしゃべらなかったんですけれども、この寺西先生のお蔭で私たちもあんまり物怖じしないで下手な英語でもしゃべるような訓練が出来たと思います。それは後に役に立ったような気がします。次に書きました大塚高信という方は、これは英文法学者、あるいは英語学者として著名な方で、著書もたくさんにございますが、それから非常に教育と研究とに熱心な方で、ほとんど夜も寝ないで勉強なさるのか、朝なんか全然顔も洗わないで学校にいらっしゃる。しかし非常に授業には熱心で、そのせいかどうか知りませんが、この大塚先生が担任だったクラスからは何人かの著名な英文法学者が生まれました。安井稔とか荒木一雄とか、今は大家になっていますが、みんなこの大塚先生の弟子であります。次に書きました渡辺半次郎という先生は、学問的な探究心が強く、特にＯＥＤを引くことにおいてものすごい情熱を持っておられまして、学生に対しても、どんな簡単な単語でもいちいちＯＥＤを引かないと承知しないというような先生でした。で、引いてみますと我々の考えていたのと案外違う意味も出てくるわけでして、その点ではやはりこの先生の教

えて下さったことは役に立ったと思います。しかしＯＥＤに傾倒されるあまり、戦後アメリカ軍が来ましていろいろ新しいアメリカ語が入って来たり、和製英語が流行したりしたときにも、いちいち渡辺先生はＯＥＤを引いておられたような感じがします。例えば「ベースアップ」なんていう言葉ができますとさっそくＯＥＤを引いて、ＯＥＤには出ていないと言われる、そういう非常にまじめというか、おもしろい面もおありでした。次に書きました西脇順三郎先生は、元来慶應の先生ですけれども私たちの大学にも講師としてお見えになっておりました。先生のことはお書きになったものでみなさんよくご存じと思いますけれども、教室でも一風変っていて、いかにも文学というものを人間にすればこういうものになるのかと思うような非常に文学的な雰囲気を漂わせた方でした。それから絵も非常にお上手で、奥さんも絵描きだったわけです。イギリス人で絵描きでした。西脇先生も立派な絵をお描きになりました。で、あるとき雑談の途中に、ものの色というものはただ見ないで、こころの目で見ると非常に淡い色に見えるものだというようなことをおっしゃったことがあります。で、実際西脇先生のお描きになった油絵はみんな淡い色なんですね。この頃よく見られるような鮮やかな強烈な色の絵とは全然違います。それからまたあるとき西脇先生は、一般に文学というと本があって、その本が文学だと思っている人がいるけれども、そうではないのであって、文学というのはそれぞれその本を読んで、めいめいが心の中に浮かべるイメージがある、そのイメージが文学なのであると言われました。それも考えてみれば当然なんですけれども、学生の頃は何か文学というと本屋に売っているもののような感じを持っておりますので、それも我々にとっては貴重な教訓だったと思います。その次に福原麟太郎先生、福原先生は文理科大学の先生をずっと長くなさった方で、いろいろの方面のことをなさいましたし、それから随筆が非常にお上手でしたから、お読みになった方も多いだろうと思います。先生について私の非常に感心、――感心というか尊敬していることは、学生をたいへんかわいがられたということで、先生が亡くなられてから、奥様が、私が若いときに先生に見ていただいた論文の原稿や先生に宛てた手紙を全部送り返して下さいましたが、つまり先生はずっとそういうものを保存しておられた、そういう点でも立派な方だと思います。それからとにかく文学が非常にお好きで、私は当時ま

だ何もわからない学生でして、大学を受験するときに、わりあいに当時の学生には哲学の好きな学生が多かったものですから、自分もその流行にちょっとかぶれたのか、文学よりも哲学をやったらいいでしょうかとか何とか先生のところにご相談に行ったんですが、先生は全然もうそういうことは問題になさらないで、文学がいちばん人生についてよく語っているんだから文学をやりなさい、というようにはっきりと言われたのを覚えています。この問題は哲学の専門家から言えばまた別のお考えがあると思います。

学生時代の読書

高等師範とか文理科大学とかにいる間にさまざまな本を読みましたけれども、いちばん初めに好きになったのは、キャサリン・マンスフィールドでした。当時岡田美津という女の先生が今のお茶の水、当時の女高師の先生をしておられまして、その先生が注釈をつけたマンスフィールドの本が出ていて、非常に感銘を受けた短篇が多かったと思います。そのときに、さっき申しました寺西先生のところへ行ってマンスフィールドがとてもいいというようなことを言いましたら、それはいいかも知れないが、マンスフィールドにはディケンズみたいに腹の底から大笑いをするようなところがない、だからどうも私は嫌いだというような意味のことを言っておられたんですが、当時寺西先生はさっき言いました「英文学叢書」の中に、チェスタトンの書いたディケンズの伝記――評伝です――それの注釈をしておられたので、だいぶディケンズに凝っておられたのですね。ですから特に今のような批評をなさったのだと思います。その他いろいろな作家をまあほとんど何の脈絡もなしに読んでいたようなわけですけれども、そこに書きましたW・H・ハドスンというのはみなさんよくご存じの『グリーン・マンションズ』(緑の館)というのを書いた人で、自然を愛し、野鳥の好きだった人ですが、これも非常に面白いと思って読みました。後のことですが、成城大学におられた川口喬一君が『マーフィー』というベケットの作品を翻訳しておられまして、ちょうど私がその頃ロンドンにいたものですから、いろいろとわからないことを聞いて来られて、その中に何か「リーマの像」と書いてあるのが何のことかわからないなんていって質問して来られたんですが、そのリーマはこの『緑の館』に出てくる鳥みたいな自然の生活

をしている女性なんですが、その「リーマの像」がハイドパークにあるわけでして、それは行ってみればすぐにわかるんですけれども、ちょっとモダンな感じの彫刻が立っております。まあそれは後になって見たことです。それから、ハーディーというのは私の学生の頃、あるいはそれよりもっと前から非常に日本で流行した作家で、何でハーディーがそんなに流行したのかは私はよくわかりませんけれども、今でも「日本ハーディー協会」というのがありまして、ハーディーの愛好者は多いわけですが、あるいはハーディーの書くものが日本的なものとある意味で共通する点があるという理由もあるのかもしれません。例えば、だいたいハーディーに出てくる人物は家族的なしがらみみたいなもので苦しみますね。それから宿命論みたいなものによって左右される。また、昔の日本人は貧乏な人が多かったのですが、ハーディーの人物も非常に貧しいものが多い。そんなような、他にもあるでしょうが、さまざまなことが重なって、あるいはハーディーの抱いていた悲観的な人生観、そういうようなものがもしかしたらその頃の日本人に訴えたのではないかと思います。私自身もだいぶ一時はハーディーというものに傾倒して読んだ覚えがございます。それから福原先生は劇や詩とかそういうものが非常にお好きで、あるいは踊りなんかがお好きだったのですが、まあ劇のこともよくおっしゃいましたので、その影響があったのか、一時私も実際の芝居はあまり見ませんでしたけれども、劇をちょっと読んでみたことがございました。そこに書いてございますけれども、ジョン・ゴールズワージーとか（ゴールズワージーは劇ばかりじゃなくて小説も非常にたくさん書いたわけですが）、あるいはアメリカのユージーン・オニールとか、もう当時はだいぶ廃れかけていたかもしれませんが、とにかく非常に面白いと思って、一時は劇というのを一生懸命やってみようというようなことを考えたこともありました。しかし戦争が激しくなると共に、日本の劇団も軍部の圧迫を受けて振るわなくなりましたから、そういう影響もあったのか、英文学における劇の研究もそれほど盛んではなくなったような気がいたします。それからヘンリー・フィールディングというのを書いておきましたが、これは文理科大学の講師をやっていたイギリス人でピカリングという人がおりまして、このピカリング氏はイギリスの上院議員だとか言っておりましたが、英文学史の講義をしておられて、フィールディングはイギリスの十八世紀あるいは

イギリスの全時代を通じても最大の小説家だというようなことを言って大いに褒めましたので、それではと思って読んでみたわけです。確かにフィールディング、殊に『トム・ジョーンズ』というのは明るくて、行動的で、面白かったですね。で、それとの関連でいつでも英文学史で出てくるのが、『パミラ』などを書いたサミュエル・リチャードスンというわけですが、で、この頃寺井邦男という人がおられまして、やはり女高師の先生をしていて、後に京城大学の先生になった人じゃないかと思いますが、この寺井邦男という人が『イギリス小説研究』とかいう本を書きまして、その中にいろいろとイギリス小説についての当時のわりあいに新しい研究を紹介しておられたんですが、その中でリチャードスンとフィールディングとの比較をやっておりまして、それが非常に面白かったのを覚えております。つまり、リチャードスンがパミラという女性を中心として読者の涙を絞るような長い長い書簡体の小説を書いた。ところがそれに対してフィールディングは『パミラ』は打算的な小説だと、つまり読んだ方はご存じのように、パミラはミスターBという道楽息子に誘惑をされるんですが、絶対にその手に乗らない。ところが最後にミスターBが結婚しようと言うとたちまち彼と結婚するんですね。そういう結婚さえすればそれまでの嫌なことは全部忘れてしまうような打算的な道徳を女性に勧めるのはいいことではないというわけで、フィールディングはそのパロディーとして『シャミラ』とか『ジョウゼフ・アンドルーズ』を書いたわけですけれども、その経緯を今申しました寺井邦男氏がたいへん懇切丁寧に面白く書いているわけです。しかもフィールディングはリチャードスンの小説に反発しながら、だんだんにリチャードスンの方向に近づいてゆく。フィールディングが書く最後の小説は『アミーリア』という小説ですけれども、その『アミーリア』になると非常にセンチメンタルで家庭的な、つまりだらしのない夫のために奥さんのアミーリアがいかに苦労し家計を切り盛りしていくかという、ずいぶん暗い話なんですけれども、むしろリチャードスンに近いような方向に行っている。で、それはもちろん時代の一般的な趨勢にもよったものであろうし、それからフィールディングがさまざまな個人的な経験をしまして、例えば非常に愛していた奥さんが亡くなって、その奥さんの召使だった女性と暫くたったら結婚したりしてるんですが、まあいろんなことがあって、つまり社会的影響、ある

いは個人的な経験、また、反発するということは引かれることだというパラドクシカルな作用もあったのか、そういうものがいっしょになってフィールディングという人間をだんだんにリチャードスンの方へ近づけていったんじゃないかと。で、やがて十九世紀になるとますますイギリスの小説はそういう方向に進むことになるんだという、少し単純化しすぎているかもしれませんけれども、そういうようなことが書いてありまして、なかなか面白いものだなと思って当時は読みました。そんなことでフィールディングという人に興味を持ちまして、大学を出るときにはフィールディングのことを論文に書きました。

海軍兵学校教官時代

当時は戦争中ですので、さっき大庭さんからお話がございましたけれども、大学を出るとすぐに海軍に取られまして、いろいろなことをやったんですが、やがて海軍兵学校の生徒を教えることになりまして、毎日兵学校で英語を六時間ずつ教えさせられました。今考えるとよくまあ毎日六時間もやったものだと思いますけれども、若いというのは不思議なもので、そんなに苦しいこととも思わなかったですね。とにかく教えている方が、その後でやる陸戦の訓練だとかカッターの何だとか、そういうものよりはずっと気が楽ですから、まあ私は体を動かすことが嫌いでしたから、まだ英語を教えている方がいいと思っておりました。で、井上成美――暫く前、阿川弘之氏の本が出ましたけれども――、この人は海軍兵学校の校長だった人で、英語に関してなかなか見識のある人で、教科書も非常にいいものを使っていましたし、それから教えるのにもほとんど英語だけを使って教えて日本語はあまり使わせない、辞書も英和辞典ではなしにいわゆる英英辞典を使わせておりました。で、私が行った頃は既に井上という人は校長ではありませんでしたけれども、その採用されたやり方はそのままに残っておりまして、だから当時の戦争中の日本で、ああいうふうに英語を一生懸命やっていたのは兵学校だけなんじゃないかと今になると思います。まあそのせいかどうか知りませんが、その後戦争が終って、兵学校の二年とか三年でやめた者で、いろいろの学校に進んで非常に立派な仕事をした人はたくさんにおられます。英語の力だけではないでしょうけれども、それも役に立ったのかもしれません。

教師になって

私は海軍は二年いただけで戦争が終って戻ってきたわけで、それから暫くは田舎で遊んでおりまして、それから教師になったのですが、教師というのは別に変ったことはないので、学生と同じようなもので、ただ誰か言ってましたように、黒板に向かっていた人が今度は黒板を背中にしただけだというような、あまり変りばえはしないものです。教師になってからは最初はディケンズを一生懸命に読みました。どのくらい面白かったのかはわかりませんが、とにかく全作品を読んでみるということを目標にして読んでみたんですね。まだその頃は戦後であまり本がありませんでしたけれども、福原先生の本を貸していただいたり何かして読んでみました。だいたいディケンズのどういうところが面白かったのか今考えてみるとよくわかりませんが、なかなかディケンズという人はお話が上手で、人の心を引きつける技術に長けているんですね。例えば『デイヴィッド・コパーフィールド』というのがありますが、少年のデイヴィッドが継父に嫌われて、いよいよお母さんと別れて家を出ていく、そのときに馬車に乗ったデイヴィッドにお母さんが手を振って非常に泣くんですね。その後お母さんは間もなく病気になって死んでしまうんですが、あのとき母が泣いてくれたことが非常に嬉しいとか、まあそういうことが大変上手に書いてある。そういう全くセンチメンタルな話かもしれないけれども、このようなディケンズの特有の書き方にも大いに心を引かれた覚えがあります。それからもうひとつディケンズで面白かったのは、ディケンズの実生活がまるで波瀾万丈、小説以上に変化が多いということで、それも面白かったと思います。とにかく、非常に貧しい家に生まれながら大変な文豪になったわけで、しかもその間には失恋をしたり、あるいは奥さんと長くいっしょにいたのに奥さんと別れて若い女優と恋をしたり、いろんなことがあるわけなんで、そういう点の面白さをも感じました。ディケンズの伝記はジョン・フォースターという彼の友だちがずいぶん細かく書いているわけですが、後に私は友人たちとこのフォースターの書いたディケンズの伝記を翻訳しましたけれども、この頃抱いた興味がその基になっているかと思います。それから英語の教師になってから暫くたつと、だんだん外国の本が入って来るようになりまし

たから、イギリスの小説に関する本、いわゆる小説史ですね、イギリスの小説の歴史を書いた本が目についたら必ず買おうというような、まあ勝手な決心をしまして、いろいろ見つかると買ってきて、すぐ読むわけじゃないけれども持っておりました。で、同じ作家に関してでも見る人によってもちろんいろいろな見方をするわけで、そういうものをだんだん読んでいるうちに、自分でもイギリスの小説の歴史を、歴史とまで行かないまでも、自分の見たイギリスの小説というものを書いてみようと考えました。しかしながら自分で読める作品の数というのはごく限られておりますので、後に津田塾大学に講師として参りましたときに、津田におられた、今もいらっしゃる川本静子先生にお願いして、二人で『小説の世紀』と題する、まあイギリスの十九世紀の小説のことを論じた本を書くことになりました。

イギリスの小説に関する本を見るたびに買うという決心と同時に、もうひとつは、夏目漱石に関する本が見つかったら必ず買おうと、どういうわけか決心しておりまして、それもだいたい実行してまいりました。これは、なかなか大変なことで、殊に最近は、漱石が流行っておりますから、ずいぶん本が出ますけれども、そのたびに一々買わなくてもいいのに何ものかに義理を立てて買っております。後に何か役に立つかどうか疑わしいですけれども、まあとても漱石に関する本を自分で書くようなところまでは至らないであろうと今では思っております。それから、ディケンズを読んで――まだ充分読んだわけじゃないですけれども――、その間に今度はジョウゼフ・コンラッドという作家に興味を持ちまして、コンラッドという人はディケンズとはまた非常に違った世界を持っておりまして、殊に人生の暗い面とか、人生のひとつの底を見たような感じ、そういう小説、まあロシア的な小説だと思いますけれども、そういうのに興味を持ってコンラッドの小説を読んでみた時期もございました。その他特に興味を持ったのはジョージ・エリオットでしたけれども、エリオットというのは私の感じではどうも説明が多すぎて、人間の生き方に関する自分の理論を具体化するためにお話を語っているような感じが時にしまして、それは決して下手な小説ではないですけれども、やはり私にはあまり体質的にあわないような感じがいたします。で、同じ女流作家でもジェーン・オースティンの方がずっと人間の心理のちょっと細かい動きとか、今まで隠れていたものをふと自分の心の中に発見する話と

か、例えば『プライド・アンド・プレジュディス』だとか『エマ』だとか、ああいう書き方というのはなかなかたいしたものだ、私が言うまでもないことですけれども、そういうような印象を受けて非常に興味深く読みました。

アメリカ留学

そんなことをしているうちに何かアメリカへ行く羽目になりまして、自分の選択ではなしにコロラドというところへ、当時はまだマッカーサー元帥が君臨していた時代ですね、むこうの命令でコロラド大学へ送られました。で、そこの大学で主に十八世紀小説を読んだんですけれども、そこに十八世紀小説の先生でヘンリー・ペティットという――フランス語なら「プティ」でしょうけど――、ペティットという先生がいまして、その先生のところにリポートを出しましたら、何だかまあ一応褒めてくれたんですけれども、'too neat'(「ニートすぎる」)、'too neat' というのは恐らくあまり辻褄が合っていて面白みがないという意味だったんじゃないかと思いますけれども、まあそんなような批評をいただいたことがございました。その十八世紀小説以外にはロマンティックの研究をしている先生がいまして、ことにバイロンのことを非常な熱心さをもって講義をされたものですから、私も面白くなってバイロンを読んでみました。殊にバイロンの書いた近東の物語詩だとか、それからバイロンの実生活、お母さんの違う姉さんのオーガスタ・リーという女性との間柄とか、あるいはそういう感情的なものを一応抜け出してからの『ドン・ジュアン』における非常に闊達な話の進め方だとか、詩というよりもむしろ小説としてみても面白いような感じがします。そういうものに心を引かれました。それから、アメリカへ行くまでは私はヴァージニア・ウルフという人は知らなかったんですけれども、ここに、コロラド大学に現代のイギリス小説をやっている先生がいまして、殊にウルフが好きで、その人がいろいろとウルフの話をしてくれました。ウルフというのはよく「意識の流れ」というようなことを言われますけれども、単に意識の流れを目的なしに追っているわけじゃなくて、そう言いながらもたいへん厳密な精密な構成をもって小説を書いているということは読んでみればすぐわかることで、従ってウルフの作品はただ頭に浮ぶままに意識の流れを追っているんだという考えは、もちろん非常に浅薄

な間違った考えであると思います。

イギリス留学

それからまた日本に帰ってきて教師に戻って、で今度は成城大学へ移りましてから暫くしてイギリスへ留学させていただきました。イギリスではベッドフォード・カレッジと言ってロンドン大学のひとつである小さな大学なんですが、そこにキャサリン・ティロットスンという女性ですが、もうだいぶ年とった先生がいまして、その人がディケンズの専門家で『ディケンズ・アット・ワーク』（仕事場におけるディケンズ）という有名な本を書いたんですけれども、その人の講義を聞きました。非常に古めかしい人で、当時のイギリスの先生はもうずいぶん服装なんかもだらしなかったのですが、ティロットスンという人だけはちゃんとガウンを着て昔の大学の先生の恰好をしておりまして、学生に対しても非常に厳しくて、ちょっとでも学生がよそ見をしたり何か話をしたりするとすぐに叱ったりして、まあ十九世紀的な……。でも親切な人で、自分のゼミにいる学生の中から男の学生一人、女の学生一人を選んで、私の友達になるようにと言って紹介してくれて、その学生たちからいろいろとイギリスの若い人達の日常生活のことなんかを教えてもらうという点で有益だったと思います。ちょうどそのときにはディケンズの死後百年に当っておりまして、つまり一九七〇年ですね、で、その記念の催しがいろいろと行われておりました。殊にヴィクトリア・アンド・アルバート・ミュージアム、ヴィクトリア女王とその夫だったアルバート殿下を記念した博物館がありますが、そこでいろいろとディケンズの記念の展覧会みたいなことをやっておりまして何度も見に行きました。大勢の人が来ておりまして、ディケンズの書いた原稿がたくさん陳列してあるんですが、若いときの原稿は大きな文字で書いてあるのに、中年から晩年になるにつれて段々と文字が細かくなってくるのですね。あるお母さんが小さな子供を連れて見て歩いていて、その過程を逆にとったらしくて、ディケンズという人は初め非常に貧乏だったので、紙の節約のために若いときにはこんな小さな字で書いていたんですよと、子供にトンチンカンな教訓を垂れていました。ロンドンでは秋から冬で陰気な季節でしたけれども、私はちょうどそのときにディケンズについての英語の本を出そうとして原稿を書

いておりました。

ディケンズ・フェロウシップ創設とその後

日本に帰って来てから「ディケンズ・フェロウシップ」というものが作られまして、日本中のディケンズの愛好者が集っていろいろな催しを行うことになりました。これは、ディケンズ研究とかその他十九世紀の勉強のためには有益な会だと思います。今でもずっと続いているわけです。そういう会合がありますと、ディケンズに興味のあるいろいろの人が集りますから、この人はどういうことをやっているのかとか、どういうことに興味を持っているのかとか、そういうことがわかりますから、そういう点でいいのじゃないかと思います。とかく勉強する人間はひとりで自分の部屋に閉じ籠って瞑想に耽りがちですけれども、ときには自分以外の人達のやっていることを知らないと、自分だけの独り善がりの世界に陥ってしまいますので、そういうのを破るためにはやはり様々な社会に接触すべきだろうと思うようになりました。で、ディケンズのことを暫く集中的にやっておりましたが、やはり自分でできることというのは必ず限界がありますので、ある程度までやりますと、それ以上その人間には出来ないようになってしまうというようなことを自分で感じました。で、ディケンズは暫く休んで何か他のものをやろうかと考えまして、いろいろの作家を読んでみているうちに、ダニエル・デフォーというのはなかなか変っていて面白いと思うようになりまして、それからデフォーを何年間か読みました。デフォーというのは昔はわりあいに幼稚な、あるいは単純な作家と考えられていましたし、それから漱石は『文学評論』の中でスウィフトは非常に褒めておりますが、デフォーに関しては全く何ら取るところのない凡庸な作家であるというような断定を下しているわけですね。けれどもデフォーを読んでみると決してそうではなくて、実に様々な複雑な要素を含んでいる作家だと思うようになりました。だいたいデフォーという名前自体がですね、元来はデフォーは「フォー」という人だったんですが、それに「ドゥ」というのをくっつけて「デフォー」としたんですけれども、一般の解説書ではデフォーは自分が商人の子供であるという生い立ちを恥ずかしく思って、まあ少し上流あるいは貴族の出であるというような感じを出すためにわざわざ「デフォー」と名のった

んだというのが通説になっております。しかし、もしかしたらそれは間違いなんじゃないかというのが私の感じでありまして、デフォーはそうじゃなくて、当時の非常に堕落して悪いことばっかりしていた貴族や上流階級を嘲るために、わざと自分でも「ドゥ」なんて付けたのではないかというふうに今の私は思っております。あまり上手な説明ができませんけれども、単なるスノビズムから――俗物根性から――「ドゥ」と付けたのではないのではないかというような気がいたします。このデフォーについての本をこのあいだ、本という程のものではないのですけれども、どうやらまとめまして、たぶん昨日出版された筈ですから、おこがましくも、今宣伝しておきます。で、デフォーはそれでもう一応卒業したことに自分で決めまして、この頃はキャサリン・マンスフィールドをまた少し読んでみて……、ずっと若かりし頃にマンスフィールドは面白かったわけですが、何十年か経ってまた逆戻りしたようなわけで、人間というものはそういうものなのか、あるいは私がそういう帰巣本能があるのかと思ったりしております。昔、J・B・プリーストリーの書いた『イギリス小説史』という小さな本があったんですが、その本を見ますと、芸術というものは発展はするけれども進歩はしない、ディヴェロップはするけれどもプログレスということはないんだ、ということが書いてありました。学問と芸術とは違うでしょうが、私自身の今までの休んだり怠けたりのイギリス小説の勉強もただいろいろのものを読んだ――いろいろと言っても、実は、ほんの少し読んだ――というだけで、本質的な進歩なんていうものは全然なかったというのが実感であります。殊に今反省しているのは、自分の研究にはしっかりとした方法論が不足していてどうも主観的になりがちであり、感想の羅列にすぎないきらいがあったんじゃないかというのが私の只今の感想でして、これから何とか、もし健康が許すならば、自分の立論の基礎を検討してゆきたいものだと思っております。もっと長くお話ししたかったのですけれども、種が尽きてしまいましたので……。

（平成三年六月二十二日最終講義）

宮崎孝一　著・訳書

著書

『ディケンズ小説論』研究社　一九五九年
『コンラッドの小説』垂水書房　一九六二年
『小説の世紀』開拓社　一九六八年
『イギリス小説論考』開拓社　一九六八年
The Inner Structure of Charles Dickens's Later Novels　三省堂　一九七四年
『ディケンズ――後期の小説』英潮社　一九七七年
『ダニエル・デフォー――アンビヴァレンスの航跡』研究社　一九九一年

訳書

ハーバート・リード『バイロン』研究社　一九五六年
チャールズ・ディケンズ『二都物語』大修館　一九五八年
『バイロン詩集』旺文社　一九六九年
ダニエル・デフォー『ロクサーナ』槐書房　一九八〇年
ジョン・フォースター『チャールズ・ディケンズの生涯』研友社　一九八五年

校訂・注・訳

夏目漱石『文学論』講談社　一九七九年

随想

『コロラドの月』開文社　一九七九年
『鴉の巣』三省堂　一九九一年